



2023 年度「後藤新平の会」

公開シンポジウム

「衛生の道」からみた関東大震災

去る 2023 年 7 月 8 日午後 1 時 30 分より、2023 年度「後藤新平の会」シンポジウムが東京・千代田区のプレスセンターホールで行われました（主催＝後藤新平の会）。今回のテーマは、後藤新平の生涯を貫いている「衛生の道」を通して、発災後 100 年にあたる関東大震災への後藤新平の対応や復興プランの核心に迫る議論が展開されました。ここではその模様をお届けします。

二〇二三年度公開シンポジウム

「衛生の道」からみた関東大震災

第I部 問題提起

「衛生の道」からみた関東大震災

青山 侖

後藤新平・衛生の道の里程標

春山明哲

近代都市成立史における市区改正と震災復興計画

藤森照信

『国家衛生原理』の思想と後藤新平の経営哲学

渡辺利夫

関東大震災一〇〇年での新資料発見と「衛生の道」

伏見岳人

第II部 討論

(司会) 読売新聞特別編集委員

橋本五郎

(パネリスト) 青山侖・春山明哲・藤森照信

渡辺利夫・伏見岳人

後藤新平から何を学ぶのか

なぜ、「復旧」ではなく「復興」から始めたのか

当時の政治状況

指導者、後藤新平を培った前史を考える必要性

内務省の社会政策派による都市問題のクローズアップ

失敗続きの大計画と偶然的流れが呼び寄せた

世界に誇るべき「山手線」

成功の基盤としての失敗

後藤新平のブレのなさや発想の豊かさ

政策の時間軸を考える必要性

ルネサンスに由来する「復興」

「衛生の道」につらなる後藤の「都市」論

専門家と政治家との連繋を促す知的コーディネーターの不在

平常時からの備えとしての万有学

権威と権力

万有学が担保すべきもの

コロナ禍の記録を如何に後世に伝えるか——「備えよ常に」

今の政治は後藤新平から何を学ぶべきか

『国家衛生原理』の思想と 後藤新平の経営哲学

渡辺利夫

わたなべ・としお 一九三九年生まれ。東京工業大学名誉教授、
拓殖大学顧問、公益財団法人オイスカ会長。日本李登輝友の会
会長。一般社団法人高齢者活躍支援協議会会長。専門は開発経
済学と現在アジア経済論。著書は多数あるが、近年の後藤新平
関係のものとして、『後藤新平の台湾——人類もまた生物の一
つなり』（中公選書、二〇二一年）がある。

『衛生の道』の原点としての『国家衛生原理』

渡辺利夫と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今
日のシンポジウムのキーワードは「衛生の道」であります。今
後藤新平のこのコンセプトの原点は、後藤が内務省の衛生局長
の時代、明治二十二年、三十二歳のときに執筆した著書『国家
衛生原理』にあります。この著作、『国家衛生原理』の執筆を
通じまして、後藤の思考というか考えていることが言語化され、
思想となり信条となったのです。その信条が後藤の人生を方向
づけたというふうに私は考えておりますので、この著作につい
て、今日は第一回目の発言の時間を費やさせていただきますと

思っています。

春山先生もさっきおっしゃいましたけれども、後藤という人
物は政治家としては実に多作、たくさん物を書いた人物であ
ります。実際山のようなデジタルコレクションがあります。し
かしこの今申し上げた著作、『国家衛生原理』ほど自分の人間観
国家観あるいは世界観をダイナミックに描いた著作は、他にな
いと私は思っております。そんなわけで、この著作についての
私の見方を以下申し上げてみたいと思います。関東大震災の話
は既に何人かの先生がされており、私の後の伏見さんもまたお
やりになるだろうと思いますので、私は話の焦点をいま言った
ことに当ててみたいと思います。

『国家衛生原理』と社会進化論

後藤のこの著作のベースになったのは、かつてソーシャル・
ダーウィニズムと称され、そして一世を風靡した、いわば社会
進化論であります。御承知と思えますけれども、チャールズ・
ダーウィンが『種の起源』によって解き明かしましたのがこれ
です。生存競争とか適者生存、そういう概念を基礎とするとこ
ろの生物学的な進化論です。この進化論が、実は生物学という
領域を超えて社会思想にまで深甚な影響を与えていくようにな
るわけです。ダーウィンはこう説きます。生命体としての個体
が次世代に継承されていくためには、自分を取り巻く環境に自

分がうまく適応しようと、個体間で競争が生まれるわけですね。

この生存競争の過程で、環境に順応できた個体が生き延びる。適応できなかった個体は自然淘汰され、そうして生命体全体としての進化が続いていくのだとダーウィンは説いたわけですね。

面白いのは、このダーウィンの生物学的進化論を社会進化論として提起したのが、ハーバート・スペンサーであるわけですね。いま「適者生存」という言葉を使いましたが、これは実はスペンサーの造語であります。私想像しますが、そもそも社会が進歩するという思想は、スペンサー以前にあつては希薄なものではなかったかと思うのです。しかし当時の欧米諸国を巻き込んだ大変な技術進歩と産業化の波、これは社会に大きな変動をもたらしたわけですが、これだけの変動があるんだから、

渡辺利夫氏

この変動には何か説明さるべき原理があるはずだと、少しずつ知識人は考え始めたのでしよう。スペンサーはその嚆矢となったのであります。後藤新平という人物の思想を深く捉えたのも、このスペンサー流の社会進化論



でした。

『国家衛生原理』にみられる徹底的な価値の相対化

後藤は、さっきの『国家衛生原理』の中でこんなふうにごつております。私の現代語訳ですが、ちょっと聞いてください。「生存競争の道は瞬時たりとも絶えることはなく、適者生存の道理から離れることもできない」、「それゆえ、いやしくも生を授けられた者は、競争の攻撃に抵抗し、これを克服し、自らを養い生殖を続けなければ生を全うすることはできない。人間だけはそうではないというわけにはいかない。人間も生物の一つだからである」。この最後のフレーズですね。「人類も亦実ニ生物ノ一ナリ」と、そう彼は主張したわけですね。実はこのように見定められたことが後藤の出発点であり、後で申し上げますけれども、これは彼の到達点でもあったんじゃないかというふうに私は考えております。

いま申し上げた文章に続いて、こんなふうには彼は言っています。「人間が生きていくことの目的について、彼はこう表現しています。「生体を傷つけるものに抵抗し、これを克服し、公正を保ちながら給養と生殖を営み、心と体を健全に発達させるのに十分な生活状態、すなわち生理的円満を確保することが、人間の生の目的にはかならない」。この最後のフレーズですね。「生理的円満を確保すること、これが人間の生の目的である」と、

後藤は唱えているわけですね。

もう一つ続けて行きましょうか。人間も生物の一つである、それがゆえにさまざまな「外装」、人間を外側から覆っているものを全部取り払って、「最終的に残る人間生存の究極的な目的は、生理的円満の確保にある」というのが、彼の思想のいわば原点です。

もう少し見ますと、「実は人間がこの生理的円満を求めるのは、人間の中に本来的に埋め込まれている生理的動機のゆえである」、こう言っております。ちょっとわかりにくかったでしょうか。つまり生理的動機に基づいて生理的円満を求める、これを手にすることが人生の最終的な目的であると、彼は人間や人間社会を、このような観点で見ているということですね。

こうも言っております。「正邪とか善悪という倫理は、この最終的目的である生理的円満を獲得するための仮称にすぎない」。もう少し言いますと、後藤はこうも言っています。「社会の事柄について、正邪だとか正・不正だというのは、実は健全なる生活を営むのにそれが適正であるのか否か、つまりは生理的円満に資するの否かだということにはかならない」と、こういうふうに言っているわけですね。生理的円満に資するものが正であり、これに資することのないものが邪である。正邪、正・不正などの道徳にはそれ自体意味がない、こういう即物的な見方です。別の表現で言えば、価値というものの徹底的な相対化

を後藤はやったわけでありませう。

後藤新平の国家起源説——予定調和の不可能性

さて、もう少し前に進みましょう。今日もこれがテーマなんです。が、「衛生」であります。後藤の唱える衛生の概念は、通例のものよりは広いと思えますね。人間の生存を保証する社会的機能、法や制度や組織、医療、あるいは上下水道を含むインフラ、全体を指すものです。つまりさっきの言葉を使えば人間の生理的円満を満たすための法や制度や組織のことごとくが衛生にかかわるといっています。もっとさらに進みます、実は国家とは衛生を保障するための衛生団体だというのが彼の考え方なんです。

どうしてそうなるのかというと、こういうことです。人間の生理的円満は個々の力で到底確保できない。個々の人間の力を超えた公共の力が不可欠である。個々の人間が生理的円満を放縦に追求しても、これを手にすることはできない。個々の人間の生理的円満を満たすには、公共的秩序が不可欠だということです。そしてこの公共的秩序の形成者がつまりは国家なのだ。後藤は言っているわけですね。

いま言ったことをまとめますと、人間に内在する生理的円満への欲求が国家の存在を必然的に求める、そういう思考の回路が後藤のものであったわけですね。別の言葉で言えば、これが後

藤の国家起源説ですね。国家というものがなぜあるのか、存在するのか、国家起源説だと私は見ています。

逆に言いますと後藤の社会観は、個々の人間が私的利益を追求していけば、それが自己運動となっていて最終的に最適解につながるというふうな、いわば予定調和的な世界観を一切排した物の見方だということになるわけでして、若いとき私は、この文章を読んだときにどきっ、ときせられたことがあります。予定調和的な世界観とは際立って対照的な世界観が、後藤新平のものであったというわけでありませぬ。

後藤思想の実現過程としての台湾

この後藤の思想の実現の場がまずは台湾でした。後藤は、台湾住民が生理的円満を得ようと、どのような慣行の中で生きてきたか、まずはこのことを徹底調査することから始めなければならぬと考えます。こういう大変有名なエピソードがあります。後藤は、第四代の台湾総督、児玉源太郎に同道して台湾に行つて、民政局長、次いで民政長官になるわけですね。そして児玉から、今度俺は総督に就任したんだから、早速施政方針演説をやらなきゃならない、そのための原稿、草稿をしたためよと、そういうふうな後藤は命じられたんですね。そのときに後藤は何と言ったかというところ、あの児玉に対してですよ、「今は施政方針を表明する時期ではありません」とはっきり述べたと

いう文章があります。総督がまずやるべきことは、総督がその統治を委任された台湾の住民生活のありよう、あるいは台湾社会のグラスルーツに古くから伝わる慣行、つまり旧慣ですね、これを調査することなんだと、その上で、さつき春山先生がおっしゃっていた、生物学の原理に基づいて統治を開始しようではないかと、こういうふうな言つたわけですね。

さて、ここからが生物学の原理であります。個々の生物はそれぞれ固有の生態的環境の中で生きている、だから一国の生物を他国の土壌や、天候の違う他国に持つていって移植しようとしても、うまくいくわけではないというわけですね。個人や集団の中に古くから伝わる固有の習慣、制度、これを無視して権力を一方的に行使してはならないと、こういう意味です。そうではなくて、権力が行使される場の習慣、制度を十分に尊重して、これとできるだけ齟齬を来さないような政策が必要だと、そういうふうな考えたとところに、後藤の思想のいわば練磨を私は見ているということです。春山先生がさつき紹介されましたのもう引用はやめますけれども、「鯛の日とヒラメの日」という先ほど御紹介されたエッセイなどは、この点を非常に、誰にもわかる形で話しているものだろうと思います。

後藤はいま申し上げたように、児玉源太郎という権威と権力において比類のない軍政家の信頼を得て、しかも帝国憲法や帝国議会の制約からも離れてフロンティア、台湾という白いキャ

ンパスの上に、生物学の原理に基づきいろいろな政策を自在に展開した八年余であります。アヘン漸禁策、土匪招降策、旧慣調査、土地制度改革、衛生事業、インフラ整備事業、こういったものを次々展開していったことでもあります。これらの近代化の基盤形成は、後藤の思想と政策によって可能になったのです。もう時間がなくて言及するいとまがありませんけれども、こういった事業を展開するには人材が必要です。その人材抜擢、抜擢された人間への後藤の全幅的な信頼、それから信頼に応える技術者や官僚たちの後藤に対する献身。こういったストーリーも本来であれば申し上げなければならぬと思います。が、ちょっと時間をオーバーしました。以上であります。ありがとうございます。

藤原 渡辺先生、どうもありがとうございました。それでは最後にもうお一方、パネリストからの問題提起で、まず前半を終わりたいと思います。これまでかなりキャリアのある学者さんの方からの発言でしたけれども、本当に最後ですが新進気鋭の、いま東北大学教授の伏見岳人さん、よろしく願います。